

法林山 ほうりんざん  
たんけい  
擔景寺



本堂外観



本堂内陣

「新編武蔵風土記稿」に、擔景寺は、「一向宗京師西本願寺末法林山ト號ス本尊彌陀ハ恵心僧都ノ作ナリ当寺ハ堀久太郎ノ嫡子順太郎後ニ佛門ニ入法體ヲ順覺ト號シ當寺ヲ開キシト云云」とある。

擔景寺の開祖の「順覺」は同風土記には、堀久太郎（信長の側近の堀秀政の子で元和元年（一六一五）寂とあるが、正しくは、天和元年（一六八一）寂である。従って、擔景寺の開基は江戸時代初めの一六六〇年頃と思われる。同じく風土記には「寶物」として、東照宮御所持の物と伝わる「香箱」（図入り）や親鸞聖人自画像など十数点の記載があるが、現在は見当たらない。しかし、徳川の姫様がお召しと伝えられる女駕籠が保存されていて、幸手市の文化財になっている。



徳川家の女駕籠

本堂は、第四代「全達」が延享二年（二七四五）に建立した木造建築で、今から二百七十年程前の建物である。この本堂は、古くは「寺子屋」として活用され、第二次世界大戦の折には東京から集団疎開した児童の宿泊所となった。関東大震災にも倒壊しなかつた本堂は、第十一代「果陸」が補強工事に体を張って従事し、第十二代「韶秀」が内外陣の荘厳に尽力したので、昭和五十九年十二月五日の京都西本願寺の即如御門主のご巡

回の折には、「関東でこれほど立派に寺院が荘厳されているとは、すばらしい」とお褒めにあずかった。

幸手市の現在は、觀光バスが立ち寄る程の桜の名所だが、かつては日光街道の宿場町として栄えた地である。

国会図書館所蔵の「日光街道俯瞰図」には、擔景寺の山門・本堂・庫裡・鐘楼・池（現在は埋め立てられて寺院の駐車場）等が描かれている。俯瞰図の鐘楼は関東大震災で倒壊し、梵鐘は第二次世界大戦の時、供出をして弾丸になってしまったが、第十一代「果陸」が昭和四十年に、当時としては珍しい鉄筋コンクリート製の鐘楼を再建し、新たに鑄造した梵鐘も収められた。

山門は、明和四年（一七六五）の建立だが、種々の彫刻は昭和になってからのもので、本堂の外壁彫刻と共に第十二代が施した。山門脇の六字名号の碑は、擔景寺所蔵の、真筆、本願寺第二十一代明如上人の幅より「名号と蓮座」を拡大・刻印して、平成二年五月二十一日に第十二代が建立した。



山門と六字名号碑